

# 弘智とごぼう

## 大浦を歩く

### 匠探訪

—74—

300年ほど前から江戸市中で知られたものに「弘智法印」と「大浦ごぼう」があります。

弘智法印は、新潟県長岡市の西生寺にまつられる日本最



蓮花寺境内の弘智法印堂

古の即身仏(ミイラ)です。弘智は1290年代に大浦の鈴木五郎左衛門の次男に生まれ、蓮花寺で僧侶になったと伝わっています。50代はじめて蓮花寺を去り、修行・伝道の旅に出て全国に33か寺を建てたのち、最後は日本海を望む弥彦山中で修行し、即身仏となったとされます。

現在全国に残る約24体の即身仏のうち、弘智は学術調査によって約640年前のものと考え、「日本で最も有名な即身仏」といわれていますが、どうして大浦生まれといわれるようになったのでしょうか。

弘智の即身仏は1685年ごろから紀行文などに紹介され、松尾芭蕉も旅の途中で見ているそうで、その後江戸・日本橋の人形浄瑠璃一座が弘智をモデルに上演するなどして広く知られていたようです。

1800年ごろ大浦村の喜助という者が、はるばる

越後・西生寺まで出向いて「即身仏は先祖だから返して欲しい」と願ったものかなわらず、替わりに木像が蓮花寺に贈られたと伝わっています。喜助は実在し、その像は蓮花寺境内の「弘智法印堂」にまつられています。

「大浦ごぼう」は、成田山新勝寺に納められ精進料理として振る舞われることで知られています。新勝寺の記録では、1711年にお歳暮として「例年の通り」佐倉藩主に献上されたことが知られます。そのころ同寺の住職照範は、佐倉藩主との関係から成田不動尊の江戸進出をはかるなど、新勝寺隆盛の礎を築きました。当時、照範は八日市場・見徳寺住職との交流もあることから大浦ごぼうを知り、成田山に納めるきっかけになったとも考えられます。1735年に江戸で出版された地誌に「下総ノ大浦産」と紹介されました。

大浦村喜助と新勝寺照範上人、この2人が「弘智法印と大浦ごぼう」を有名にした功労者といえるかもしれません。

問 秘書課広報聴班

☎ 73・0080